

わかやまで
暮らすこと 働くこと

～それぞれの”自分らしさ”～

まえがき



「自分らしく働き、暮らす」。

一見、実践するのが難しく感じるかもしれません。働いていると毎日が同じことの繰り返しで、“自分はこんなもんだ、世の中こんなもんだ”と思ったり、お金のためと割り切る時もあるでしょう。

和歌山県は、県人口における15歳～64歳の生産年齢人口が全国で5番目に低い。依然多くの若者が県外へ流出している状況です。

他府県に比べれば田舎だし、仕事が少ない。思い描いた生活ができず、少し諦めたりしている若者もいるかもしれません。

ですが本当にそうでしょうか？ わたしたちは和歌山で働き暮らす若者たちに、働くことにたいする価値観や和歌山で暮らすことの不安や期待を、ありのままインタビューしました。

そうすると、上向きな気持ちで物事を考え、自分らしい働き方、暮らしを实践する・しようとしている若者たちの姿が見えてきました。

「自分らしく働き、暮らす」には、今の社会や、与えられた環境の中でいかに気持ちを上向きにして過ごせるかが大切なのだと思います。

この冊子を読んだ皆さんが、“和歌山で働いて暮らすのも楽しいかも”と感じて頂けると嬉しいです。

【参考】

統計局ホームページ 人口推計(平成26年10月1日現在)

和歌山県長期総合計画(平成29年度～平成38年度)素案より

それぞれの自分らしさ 目次



Story1

「働くことは生きること」・・・・・・・・・・ 3

Story2

「子育てしてても自分らしさを忘れない」・・・・・・・・ 5

Story3

「失敗を糧に行動し続ける」・・・・・・・・・・ 7

Story4

「常に目標をもって働きたい」・・・・・・・・・・ 9

Story5

「好きなことを突き詰める」・・・・・・・・・・ 11

Story6

「自分の生きたい方向へ歩いていく 和歌山頼りあいLIFE」・・・ 13

Story7

「理想は子どもに誇れるお父さん」・・・・・・・・ 15

Story8

「安定で見た将来の展望」・・・・・・・・・・ 17

Story9

「向き不向きはあるけれど」・・・・・・・・・・ 19

働くことは生きること



夫婦で鍼灸整骨院を経営。海外も飛び回るパワフルな妻と信念をしっかりと持った夫。2人の素敵な夫婦の“はたらく”について、妻である紗世さんの視点から語っていただきました。

“夫婦経営”で築くよりよい家庭

結婚するにあたって、これから2人でより良い家庭を築くには、と考えたとき、“夫婦経営”という選択肢が生まれました。もともと、夫が整骨院、私が英会話講師を個人で経営していたのですが、結婚するにあたって夫の整骨院を2人で経営していこう、と決めました。

夫は共同経営に対してどちらかというと前向きではなかったのですが、2人でバラバラに小さな仕事を育てていくより、ふたりで大きくしっかりした幹を育てていくほうが、効率もよいし安定した家庭を築けるんじゃないかなと。母親がバリバリのキャリアウーマンだったことから、自分は逆に相手を支えられるような生き方に憧れていたということもあったのだと思います。

ただ、“夫に付き従って働く妻”というわけではありません。

元々私が薬膳料理に興味を持っていて学びながら家でも少しずつ取り入れていたのですが、それに影響を受けたのか、整骨院でも身体の面だけではなく身体の内側から患者さんを診ていく方針に変わっていったり。。。そういうときはすごくワクワクしますよね。

お互いが“メンター”として支え合う

あまり夫婦っぽく見られないのですが、夫婦で将来の生き方や働き方について、定期的に話す機会を作っていて、確かにお互い夫婦というより“メンター(※)”といった方がよいのかも知れないです。

お互いプレッシャーに感じることもなくはないですが、負担に思うのとも少し違うなど。そうやって、整骨院の経営がうまくいくことで、お互いも、そして家庭もプラスの方向に向いていっているなと感じます。

子どもを通じて社会を見る

今、妊活中なのですが、新しく“子どもを通じて社会を見ていく”という視点が生まれると思っています。子どもは1年、3年という短いスパンで、大きく変化します。自分の子どもへの接し方によって、子どもも変わるし社会も変わると思う。長年、子供向けの英会話講師をしていたからですかね。そういう将来を想像するとすごく面白いし、ワクワクしますね。

このワクワクが、家庭全体を良くすると思いますし、働くことにもきっと新しい影響を与えていくんじゃないかな、と。

働くことは生きること、決して切り離せません。だからこそ、より良い暮らしを作っていくために、より良い仕事を二人で作っていきたいと思います。

(※)仕事や人生における指導者、助言者

子育てしてても「自分らしさ」を忘れない



木戸地 美也子(Kidoji Miyako)
海堀 紗世(Kaihori Sayo)
1984年生まれ 御坊市出身
古民家運営

御坊市にある自宅の古民家で子育て世代と社会をつなぐ活動をしており、自身も3人の子どもを育てているお母さん。古民家では女性が社会で活躍しやすいように、子育て中に社会のマナーを覚え、活動の道筋をつくり、情報・お金の流れの感覚を磨いて社会的自立を応援している。

女性の癒しの場所に出会って

高校を卒業して、アメリカに2ヶ月間ホームステイしました。そしてある晩、ホストファミリーに女性の集会に連れて行ってもらった時のことです。「wow!(すごい!)」。大きな体育館の中を囲うように机が並べられていて、若くてヤンチャな美容師や主婦のネイリストたちが女性たちにサービスしているんです。デザートが置いてあって自由に食べられるようにもなっていました。地域の10代～90代の女性が利用していて、女性がサービスを受けている間、子守はもちろん男性の役目で、しかもすべて無料でした。この癒しの場を日本に持って帰れたらなあ、と夢が膨らんだ日になったんです。

(※)働く女性の割合をグラフで示した時、出産・育児期にあたる30歳代が低いことでグラフの形状がM字になること

子育て中も学びと成長の時間

子どもがたくさん欲しかったので、日本に帰ってきてからは子育てでも仕事も両立できそうなことをしようと思いました。そしてアメリカで学んだことを生かして美容と英会話講師を始めたんです。第1子妊娠の時までして、子どもができて自分らしいことを子どもと一緒にいながら、また託児付きでできる環境は必要だと実感しましたね。そういう場や機会にアンテナを張っていたとき、知人に「うちの子にも英会話教えて」と声をかけてもらったんです。そこで、私の子どもも一緒に参加してクラスをつくりました。知育英会話のクラスで、アルファベットで遊びながら英語を好きになってもらうことで英語アレルギーをなくす工夫をしています。女性のM字カーブってあるじゃないですか。Mの底だからこそできる学び、成長や出会いがあると思うんです。私がすべてに疲れて子どもの前で泣いた時、当時5歳の子どもが「ママすごい。頑張ってるで!」となぐさめてくれたんです。余計涙が出ましたが、パワーができました。

古民家を運営するにあたって

古民家では英会話をはじめ、部・サークル・クラスに分かれて色々な活動を行っています。私自身も講座などを積極的に受け、先輩ママにアドバイスをもらいながら、子育て・家族を二の次にしないように心掛けています。でも、子育てしながら働く女性はとにかく忙しい！（パパは仕事で忙しくして家にいないことが多いし…）毎日試行錯誤しながら生活しています。例えば、子どもの前で連絡をとるときは、「〇〇さんからメッセージ来たからお返事させてね」と言うなど、子どもを安心させるよう接し方を考えています。忙しすぎて子どもの面倒を見切れなかった時は、親に預けて行くようにしたりもしています。

古民家ではそのような、自分らしいことも形にしたい、でも家族のこともちゃんと考えたいと悩む女性が集まれば良いと思います。1人で悩むとしんどいけど、みんなで悩むと笑えてきます。

常に目標をもって働きたい



社会福祉士であるなかいさん。公務員という枠の中でも、とても前向きにはたらく一方、2年前に結婚した新婚さんでもあります。インタビューでは、仕事への向き合い方と同時に、プライベートと仕事の中で揺れ動く姿についてもお話をお伺いしました。

“劣等感”を働く理由に変える

私自身、昔から高い志や将来の目標を持っていたわけではありません。高校時代には自分の将来についてとても悩んでいた時期があって、その時に目に入ってきたのが児童虐待についてのニュースでした。元々、劣等感が強かったからか「人の役に立ちたい」「ありがとうと言われたい。」という意識が大きくて、それが“社会福祉士”という今の仕事を決めた大きな要因の一つだったと思います。働き始め、元来の劣等感に悩まされることも多々ありますが、色々な人と関わって仕事に携わっていくことで日々すごくワクワクさせられています。同僚だけでなく、他の団体のスタッフの方と一緒に仕事を

することも多いのですが、同じ課題に向き合っている、立場によって色々な考え方があって、そういった価値観に触れることも、そして立場を越えて関係を作りながらひとつの課題に向き合っていくのもすごく楽しくて。

部署を移ってから、前の部署で関わっていた人たちから声をかけてもらえたり、「頼りにしていた」という言葉をかけてもらえたりすると、自分でも誰かの役に立てていたんだな、と実感しますね。

今、子どもを産むということ

この春から、元々一番関心のあった児童福祉の分野で働くことになりました。嬉しくはあるのですが、同時に「自分にはまだ早い」という気持ちも大きいです。自分が全力で向き合いたい仕事だったからこと、もう少し色々な部署を回って経験を積んでから就きたかったと思ったことが大きな理由。そしてもうひとつの理由は、私自身がまだ子どもを産んでいないということ。同年代の友人たちが出産ラッシュのため、そろそろ子どもを、と思わないわけではないのですが、今は、仕事もすごく充実しているし、将来のための勉強もしっかりしていきたい。出産を機会に仕事を辞めるということは考えてはいませんが、育児中の間のブランクが恐くて、メリット・デメリットで子どもを語るものではないというのはわかっている、子どもを生むことに今は前向きになれないんです。

常に目標をもって働きたい

今はまだできないことも多く、「自分はまだまだ」と思うことも少なくありません。ただ、それは決してネガティブな意味だけではなく、めざすべき像があるから「まだまだ」と思えるんだと思います。私は目標がなければきっと仕事ができない。ですから、常に目標をもって、自分のめざすべき像に向かって働きたいと思います。

好きなことを突き詰める。



藤田 恵 (Fujita Megumi)
1988年生まれ、和歌山市出身
フリーライター

好きなことを語りだしたら止まらない。愛の溢れる様々な特集記事を世に送り出してきた藤田さんに、和歌山だからこそできることの魅力についてお聞きしました。

“好き”から出会いが生まれた

昔からマンガが大好きで、出版の仕事がしたいと就職活動をしていたところ、たまたま人に恵まれ就職したのが、地元和歌山の出版社でした。取り扱っている出版物の主なターゲットが20、30代だったことから、新人から積極的にアイデアを求められる。自然とアンテナを高く持つことになりましたし、そうすることでたくさんの魅力的なモノに出会えました。特に、仕事という枠を越えて一生付き合っていける友人と多く出会えたことが、大きな財産になっています。実は、今の夫との出会いも、きっかけは仕事で取材したことだったんですよ。

和歌山で“好き”を突き詰めるということ

私の人生を変えた一つの出逢い、それが戦国武将「真田幸村」との出逢いでした。和歌山は、こんなに素晴らしい武将と縁があるのに、知らないのは勿体無い!と自社企画として真田に関する連載をスタート。その連載も好評に終えた頃、大河ドラマで真田幸村を取り上げられるのに伴い、NHK和歌山放送局で特集番組が組まれることになりました。その出演者として白羽の矢が立ったのが、なんと私だったのです。理由は、私自身が自社企画を組む際も、でしたが、和歌山に意外にも真田について語れる女性がいなかったから。そのため、この番組へ出演させていただいたのをきっかけに、九度山町で開催された真田祭など「真田」を冠する様々な機会にお声を掛けてもらえることになりました。和歌山の特徴のひとつは、まだ誰も取り組んでいない分野がたくさんあるので、自分はこれが好きだ、ということに本気で取り組んだら、誰でも必ず「和歌山で〇〇と言ったらあの人!」になれる。そういう意味で、とても可能性のある街だなと感じますね。

第二の人生へ

昨年、結婚を機に5年勤めた出版社を退職し、岡山県へ移住しましたが、出産後の働き方がうまく定まらなくて。陶芸家である夫は、ユニットとして陶芸の仕事を手伝って欲しいが、もし別の仕事に就くなら自分自身が好きな仕事に就いてほしいと言っています。ただ、陶芸の仕事が必ずしも安定した収入のあるものではないので、子どものことを考えると、したいことに拘らず、毎月固定収入のある仕事をすべきではないか、と。

今まで自分の「好きなこと」に軸足を置いて仕事にも向き合ってきたので、子どもができることで、自分自身の働くことに対する意識がこんなに変わるのか、と実感しています。まだ、第二の人生の歩み方は定まってはいませんが、もう少し、今の自分に必要な働き方を考えていきたいです。

自分の生きたい方向へ歩いていく 和歌山頼りあいLIFE



松永 久視子
(Matsunaga Kumiko)
1976年生まれ 和歌山市出身
団体職員

高校卒業後、女子大へ進学した松永さん。そこは、自治会活動やサークル、部活、学祭などすべてを女性だけで運営し、のびのびと女性たちが自分たちの能

力を発揮できる場。「そこでがっつりやって、なんでもできるノウハウを身に着けたん」。その後、大阪で就職しますが、自分の志との矛盾を感じます。結婚、出産ののち和歌山に戻り、現在は自分の志を生かせる仕事をしながら、転入者を支援する「転勤☆ズ」や「ポポロハスマーケット」などで活躍されています。

3つの軸があって、はじめてバランスが取れる

家族と私、お金稼ぐことと私、社会貢献と私この三つがあってはじめて、私の中でバランスが取れるんです。家計は半々で責任持つから、働くということは絶対に譲れないし、おうちの中で家族の一員としていろんなことをするのは当たり前で、そこから一歩ふみだして社会的なこと、ボランティアに近いようなことをやってはじめて、私がこの世に存在していると感じるんです。夫も「こういう人や。」ってわかって一緒にいるし、子どもたちも小さいときから一緒に行動しているから、「こんなもんや!」と思っています(笑)

私がこう生きたい。地に足つけて、周りに頼る、和歌山ライフ。

いまフルタイムで働いていて、子どもたちは学童保育へ行っているんだけど、残業などでお迎えに行けないときは祖父にお願いして、子育て手伝ってもらっています。それ以外にも近所のママ友にも手伝ってもらっているんです。子どもたちだけでお留守番ができない時は近所のママ友に「見てくれる?」と連絡して、いいよーって言われたら、家に電話かけて「〇〇ちゃんところへ行っという」とか。

大阪のマンションで子育てしている時はご近所さんが訪ねてくることもなく、スーパーへ買い物に行って、レジの方に「ありがとうございました」と言った時「今日はじめてしゃべった」と涙がでたことがあって。「これは人間的でないな」と思ったんです。地に足をつけて、ご近所さんと行き来しながら、生活したいと思って和歌山に帰ってきました。

一人一人がお互いに生き方を認められるように

「女性の活躍」が話題になっているけど、私は一人一人が自分らしく無理せず生きていける社会がいいなと思っています。男性の専業主夫がいて女性がバリバリ働くのもいいし、子どもを三年間は手元で育てたいというのもありだし、専業主婦でいたい人はずっと専業主婦でいいと思うし。ボランティアに関心ないという人はそれでいい。自分がしんどかったら、人にもしんどくさせてしまうし、お互いそれぞれの背景にあるものを想像して、許しながら認め合いながら生きていけるようになったらいいと思っています。そのために具体的な計画があるわけじゃないけど。今まで目標を決めて歩いてってことなくて。行き当たりばったりに分の生きたい方向に歩いていって、いまここまで来たという感じです。

世の中もうちょっと生きやすくなればいいな。それに向かってやれることはなんでもやるよ。

理想は子どもに誇れるお父さん



家電量販店で働きながら、和歌山市内のライブハウスを中心にソロギターストとして活躍する一面を持つ北田さん。大学から始めたギターの腕前はプロ級でCDを発売しており、youtubeの演奏動画チャンネル登録者数は2,000人を超える勢い。現在は1児のパパでもあり、家事、育児、仕事、音楽活動の4つを並行してこなしている。

好き、だけれども仕事にはしない

和歌山での音楽活動の始まりは、腕試しのつもりで始めた路上の演奏でした。演奏していた時に偶然通りかかった音楽教室の先生に声をかけてもらい、音楽関係の人たちとのつながりが広がってライブハウスやイベントで演奏させてもらえるようになったんです。人前で演奏するたびに聞いてくれた人が反応を返してくれて、それがとても楽しかった。

でも音楽活動を本業にしようとは全く考えていません。勤務先で安定して働いているからこそ、自分の好きな音楽活動に取り組んでいると思っているからです。また店にもよりますが、ライブハウスなどの会場を借りて演奏す

る以上は人を集めないといけないんですね。その度に「聴きに来て!」と知り合いに連絡をし続けることが苦手で、相手の迷惑にもなっているんじゃないかと感じてきたんです。それならそうした考えを理解してくれる場所だけで演奏する方が自分に合っていると考えて、音楽活動は趣味として続けることにしています。

仕事と家族とプライベートのバランス

家事、育児、仕事、音楽を並行してこなすにはそれぞれのバランスが一番大事なのかなと思います。今は、バランスを取る上での基盤は仕事になっているような気がします。以前、仕事の方がうまくいかなかった時に全体が大きく崩れてしまったことがあるんですよ。逆に仕事を機嫌よく終えることができれば、他の事も機嫌よくできますね。

またそうした事を支えてくれる環境もとても大事なんです。バランスが崩れていると妻が心配して声をかけてくれますし、音楽活動に対する職場の理解もすごくあるんですね。音楽活動のことは職場の人はみんな知っているの、演奏を聴きに来てくれたり、接客業ではありますが演奏用に固めている長めの爪も許してくれています。でもそれがお客さんと話すきっかけになったりもして。

もちろん家事と育児もやっています。妻は今のところ専業主婦ですが、一般的にどれだけ家事育児を一人でこなせるものなのかわからないので、とりあえずできることは全部手伝ってますね。子どもとも朝は一緒に起きて送り出したりもします。イクメンってありますよね。「最近のお父さんは色々するんやなあ。」て思われたいんです(笑)。子どもに好かれたいし、物心ついた時に「世話してあげたんやで。」て話をしたいんですよね。

安定で見えた将来の展望



女性作業療法士
1990年生まれ 紀美野町出身

兵庫の短期大学を出て兵庫か和歌山のどちらで就職をするか迷った末に和歌山へ戻ることを決意。現在は病院で作業療法士として勤務している。

人の喜びが自分の原動力

作業療法士を目指したのは、身近な人が病院にかかった際のリハビリを見たことがきっかけでした。リハビリを通じてその人がどんどん回復していく姿を見て引き込まれていったんです。元々、人の役に立ちたいという想いが人一倍強い性格でした。小さい頃は自分のことそっちのけで人のために取り組んでいたように思います。自己犠牲の塊ですよ（笑）でも人に喜んでもらえることが私の原動力なんです。患者さんから「箸が持てるようになってきたよ。」「体の痺れおさまってきたで。」なんて言われた日にはいつも以上にご飯がおいしく感じられますね。

安定した仕事で社会の一員に

実は兵庫の短大を出た後は事務職に就こうと思ってたんです。特に理由はなく、周りに事務職が多かったから自分も、というくらいで漠然としてましたね。そうして周りと同じことをやるというレールに乗れば社会の一員になれるし安定した生活も送れると思ってたんです。和歌山に戻ってから事務を学べる専門学校にでも行こうかなと思いながら、短期のバイトを転々とフリーターをしてました。その間にリハビリの現場に出会ったんです。今の仕事とフリーターをしていた時では働くことに対する想いが全然違います。

まず今は「明日の仕事どうしよう…」と考えることがない。それを考えるのは怖かったです。でも今は資格を取得した上で働いているという安心感があるし、何より社会の一員として必要とされていることを感じられてます。

誰かの幸せのために自分があったなら嬉しい

安定した立場があるからこそ将来の事も考えられるようになりました。私は結婚しても働き続けたいと思っています。幸い今の職場には託児所があり、出産して復帰する方もいます。自分がそうなった時にも再び同じ職場でキャリアを積んでいきたいのでそうした制度はありがたいです。自分が身に付けてきた作業療法の知識、経験、つながりを積み上げて広げていけますから。そうして人から愛されるセラピストになって、誰かが幸せになるために自分が必要であったなら嬉しいですね。

こらむ①「実際どうなん?! 地元が語る和歌山の暮らし」

和歌山といえばよく「近畿のおまけ」と言われています。

「観光」「海産物」「農産物」は、余り知られていないですが有名なのに、全国の人々からの和歌山の印象は薄いと言えるでしょう。地元の人でも詳しくない方が多いのですが、観光で言うと白浜や熊野古道、農産物なら「みなべの梅」「有田のみかん」「那賀のイチジク」「荒川の桃」などがあります。自然豊かであることから、子育てにおいてのびのびとした気持ちで育児に取り組めるのではないのでしょうか？ 釣りが趣味な家族には、加太漁港をはじめとする港に赴いてファミリーフィッシングというのも絆を深めるに適しています。

「近畿のおまけ」にしては充実した「ワークライフ」を築けるのではないのでしょうか？ 「ド」が付く程の田舎ではありますが、きっと生活も、決して不便では無いです。そんな和歌山に是非、つれもて来てもらいたいものですね。

向き不向きはあるけれど



和歌山市内で男性保育士として勤務。女性が多いイメージのある職場の中で男性保育士ならではの強みを発揮しながら日々子どもと向き合っている。

男性で保育士になること

今でこそ男性保育士は増えてきているけども、圧倒的に女性の多い職場です。そもそも男性用トイレのない園もあるくらいですからね。たしかに、これまで働いてきて女性の方が向いている職業かと思う場面もありました。例えば子どもの様子を察する力。もちろん個人差はあるけども、女性の方が子どもの様子の変化に気付くのが上手だなと感じます。いくつか普段と違う点があって、点同士を結び付けることで僕は変化に気付きますが、女性は直感的に察する人が多い。経験の差もあるかもしれないですけどね。自分のことを言葉でうまく伝えられない子もいるので、余計に非言語的なもので気付く必要があります。そういう点で苦労している男性保育士は少なくない気がしますね。

男性ならではの強み

ただ男性ならではの強みもちろんあります。遊びを派手にできるし、ボール遊びやかけっこも全力のできるので、遊びの点では子どもの受けは良い方だと思います。それに保育以外の面でも、力仕事やパソコン操作など、頼りにされることも多いんです。また保育をする側の多様性にもつながりますよね。

保育士の働き方

良い保育をしようと思うと事前準備に時間がかかります。年間予定、月予定、日予定と保育内容の検討から始まり、遠足や運動会など行事の会議や準備で時間をかけようと思えばいくらでもかけられますからね。なので、園や自分で設定するレベルが高いほど働く時間は長くなります。それに加えて日々の保育や行事の後の振り返りなどもあって長時間労働になっていることもたしかにあります。

保育士の数が足りていないという話がありますが、潜在保育士がいる中でそうした状況にあるのは、資格があっても保育に携わりたいと思える人がいないということだと思うんです。なんで保育士を選ばないのか、一回選んでも離れてそれっきりになってしまうのか、今のやってみたいと思える環境にない状況をなんとかしたいですよね。それでみんなにとって楽しく仕事ができる環境になれば嬉しいです。

こらむ②「和歌山におけるワークライフバランス」

仕事と生活を両立する上で、ワークライフバランスは大事ですよ。そしてここ和歌山でも、ワークライフバランスの実現に向けた様々な取り組みが行われているので、その一部をご紹介します。

県が運営するホームページ『わかやま子育ての広場』では、仕事と育児の両立に役立つ情報も多数掲載されているほか、男女共同参画センター「りいぶる」では、ワークライフバランスをテーマにした講演会やセミナーが数多く開催されています。

また民間企業の中でも徐々にではありますが、男性の育休取得実績を持つ会社も出てきています。県はそうした仕事と子育ての両立を推進する企業を「子育て応援企業」に認定し応援するという取り組みも進んできています。こうした行政や企業の取り組みによって、和歌山の活性化とともに仕事が「生活のため」というイメージではなく「生活を豊かにする手段」というイメージになっていけば良いですね。

あとがき



冊子作成を通じて、誰もが悩みながら自分なりの働き方、生き方を見つけていくんだなと、考えさせられました。

取材、編集、デザイン：澤田

私自身が、たびたび共感できる一冊になりました。

取材、編集、デザイン：坂本

この冊子が、和歌山で前向きに暮らし、働くことを考える一つの手がかりになれば嬉しいです。

デザイン：岸

人生を語り合える知り合える機会って生きるうえで大切と実感★

取材、編集：中井

“自分はどうありたい”のか考えさせられました。

お話を聞いた皆さん、ありがとうございました。

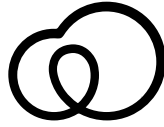
取材、編集、デザイン：木下

冊子の中の色々な価値観が沢山の人の届けば良いと思います。

コラム：的場

「自分らしさ」とは？それを見つけるきっかけになればと思います。

コラム：岩崎



WORK CAFE

NPO団体「ワーク・カフェ」について

和歌山で働く若者たちが、より良く前向きに働けるためのきっかけとなる場づくり・環境づくりを目的とし、2013年に設立しました。

20～30代の若者7人により運営を行っています。(2017年2月現在)
異業種・同年代の若者たちが、互いの価値観や仕事での悩みや想いを共有できる場「ワークカフェ」を定期的に運営する他、ブログ等を利用した若者のインタビュー記事の発信、若者が暮らすこと・働くことに関連したテーマによるワークショップなども実施しています。

E-mail : info@workcafe.org

Facebook : <https://www.facebook.com/workcafe/>

ブログ : <http://workcafe.sakura.ne.jp/main/>

この冊子は、和歌山県男女共同参画センターが実施する平成28年度「みんなに男女共同参画」提案事業により作成されました。

2017年3月発行
取材・制作:ワーク・カフェ